

鴨川納涼床

田中 羽翼

(2020 年度入学 4 期生)

納涼床といえば、京都の夏の風物詩の一つである。「川床（ゆか）」とも呼ばれ、北は二条から南は五条まで、沢山の料理店が川の上や屋外で川がよく見える場所に座敷を設け、食事や風景を楽しんでいる。川床は貴船や高雄など京都市内にいくつか存在しているが、今回は鴨川納涼床に焦点を当てて紹介していく。

まずは歴史について触れていく。鴨川納涼床の歴史は江戸時代まで遡る。戦乱の後、豊臣秀吉の三条、五条橋の架け替えなどを経て、鴨川の河原は見世物や物売りで賑わい始めた。それにともない、富裕な商人が見物席を設けたり、茶店ができたようになるようになった。これが納涼床の始まりと言われている。その後、石垣や堤が整備され、付近に花街も形成され、鴨川周辺は歓楽街へと変化していった。当時の床は浅瀬に床机を置いたり、張り出し式や鴨川の砂洲に床机を並べたものであり、「河原の涼み」と呼ばれていた。



明治時代になると、夏の時期に床を出すという風習が定着し、鴨川の右岸・左岸両方に床が出ている状態であった。両岸には高床式の床が設置され、砂洲は床机、三條



大橋の下には河原から張り出した床几が出ていたとの記録が残っている。しかし、1894 年（明治 27 年）の二条通以南の鴨川運河開削や京阪電車鴨東線の延伸により、左岸の床が姿を消すことになった。さらに、大正時代には治水工事のため床机形式の納涼床が禁止された。このことを憂慮した木屋町や先斗町の店々は

京都府に陳情し、右岸河岸の建物の脇にみそそぎ川が開削されることになった。名目上は高瀬川の水を逃すためということであったが、そこには納涼床を残したいという店々の熱い思いがあった。

昭和 4 年には半永久的な床は禁止になり、昭和 9 年の室戸台風、翌年の集中豪雨で納涼床は壊滅的な被害を受けた。さらに第二次世界大戦が始まったことにより、納涼床の灯は消え、かつての賑わっていた光景は姿を消した。戦後の昭和 25 年には数軒が設置を出願したものの、戦争中の反動として鴨川の風致を破壊するものが多く出た

め、昭和 26 年に「鴨川の高床について」の通達が出され、昭和 27 年には景観の基準となる「納涼床許可基準」が策定された。納涼床は次第に活気を取り戻し、昭和 30 年頃には 40～50 軒の店舗が設置を出願するようになった。平成に入ると、5 月から 9 月までの夜床や昼床の営業が認められるようになり、鴨川納涼床が地域ブランドとして商標登録された。現在では申請が 100 軒を超えるなど賑わいを見せ、京都の夏に欠かせない一大風物詩となっている。

次に、納涼床の厳しいルールを紹介する。日本屈指の観光都市である京都の美しい景観は厳しい条例によって保たれていることは周知の事実であり、納涼床も例外ではない。歴史的な構造物である納涼床は厳格な基準の下、色彩や造りなど、京都の景観に調和したものとなっている。

一つ目は床の高さである。床の高さはみそそぎ川の川底から床板の上面までの距離と決められている。これは、洪水の際に水位が高くなっても納涼床が浸からないようにするためである。そして、高さは原則 3.6m に揃えるように配慮しなければならない。隣り合う床の高さが大きく異なると、不揃いで連続性が損なわれる見た目になってしまう。



二つ目は床の張り出しである。床の東端がみそそぎ川東側護岸から 1.5m 以上離れていることが必要である。みそそぎ川の横は歩行者が通れるようになっているため、床の張り出しが大きいと圧迫感を与えてしまったり、物が落ちてくる危険性もある。また、張り出しを揃えることは安全性の確保だけでなく、景観の統一性においても重要な部分である。

三つ目は床の造り及び色彩である。床は母屋に連続して設置し、アーチ状などの曲線的な造りは避ける必要がある。また、治水上の安全を高めるために、床下に物置や床、足場の構造を補強する「すじかい」は設けてはならない。そして、床や足場には木材を使用しているが、白や灰、黒などの無彩色はできる限り避け、木材素材色に統一することが望ましいとされている。



四つ目は床の手すりである。一部の納涼床の手すりは伝統的な意匠とは言えないような近代的なものが見られる。手すりの意匠は納涼床の印象を大きく左右する重要な部分であるため、統一性を持たせる必要がある。

その他にも、隣り合う床に対してのすだれ掛けの高さが規制されていたり、広告物やイルミネーションなどの色電灯を用いることが

禁止されているなど、景観を守るための様々なルールが設けられている。

このように、鴨川納涼床は少しずつ形を変えながら現在へと続いていることがわかる。また、文面からも店々や行政の納涼床を後世に残すという熱い思いを汲み取ることが出来る。現在、納涼床では老舗料亭やイタリアン、フレンチ、アジア料理、カフェなど多彩な店が軒を連ねており、若い世代でも気軽に楽しむことが出来る。是非一度、京都の風情を感じに足を運んでみてはいかがだろうか。

〈参考文献〉

・京の風物詩 鴨川納涼床への誘い「納涼床の歴史」

<https://www.kyoto-yuka.com/about/history.html>（参照 2022-6-28）

・京都府（2008 年 9 月）「鴨川納涼床審査基準に係るガイドライン」

<https://www.pref.kyoto.jp/kamogawa/documents/1252399746881.pdf>（参照 2022-6-29）